

大学入学共通テスト導入に向けた試行調査（プレテスト）の問題について （別紙：有識者からいただいたコメントについて）

大学入学共通テスト導入に向けた試行調査（プレテスト）（以下「試行調査」という。）の趣旨については、10月6日付で公表した試行調査実施協力校向けのペーパー「平成29年11月に実施する大学入学共通テスト導入に向けた試行調査（プレテスト）の趣旨について」にあるとおりですが、問題冊子の公表にあたり以下の点を補足説明させていただきます。

<試行調査問題の作成体制及び作成期間について>

○ 大学入試センター・新テスト実施企画委員会に設置された問題調査研究部会の科目別ワーキンググループで担当。高校の各教科の学習成果として身に付いた大学教育の基礎力を適切に捉える作問となるよう、大学入試センターに科目別ワーキンググループの運営にあたる各教科の試験問題企画官を常勤で置くとともに、科目別ワーキンググループには高校教員も委員として参加し、高大双方の知見を反映させながら作問していくための体制を整備。

なお、実際に試験で使われる問題の作成には通常2年程度を要するが、今回の試行調査の問題については、昨年8月に文部科学省が公表した「高大接続改革の進捗状況について」においてプレテストの実施について示された後、昨年秋に委員を選任、本年夏まで10ヶ月程度で集中的に議論し作成。問題点検の作業についても今回は別部会を設置せず、科目別ワーキンググループにおいて併せて実施。

<問題のねらい等について>

- 知識の理解の質を問う問題や思考力、判断力、表現力を発揮して解く問題を、各科目におけるすべての分野で重視。解答に従来よりも時間がかかることが想定されるが、選抜試験の機能を果たすために必要な一定の間数を維持することや、各分野における問題のイメージをまんべんなく網羅することが必要。結果として、今回の試行調査の問題は最後まで解ききれない生徒がいる場合も想定し、問いの並べ方などにも留意しながら作問。
- 問題の中では、教科書等で扱われていない初見の資料等も扱われているが、あくまで「どのような場面でも、既存の知識を発揮したり授業を通じて身に付けた思考力等を発揮したりできるかどうか」を問うための題材として用いているものであり、それらの資料等の内容自体を知識として問うことを意図したものはないことに留意。
- 問題冊子のページ数は、例えば物理などは平成29年度本試験よりも減少しているが、資料の活用を重視した歴史科目や、問題解決の過程を重視した数学などでは特に増加。ただし、今回出題される問題はあくまでも検証のためのものであり、必ずしもこのまま平成

32年度からの大学入学共通テストに受け継がれるものではないことに留意。

- なお、今回の試行調査においては、得点の分布情報を利用した段階別表示や得点調整など、素点以外の成績提供の在り方についても検証する予定であることを踏まえ、目標平均正答率は設定していない。

<平成32年度に向けた問題構成や内容の検討について>

- 今回の試行調査の正答率や解答の傾向等の分析を踏まえ、大学入試センター試験に関する既存のデータも活用しながら、問題の構成や内容等を検討し、今回のような探究の過程等を重視した問題をどの程度のバランスで出題するのか見極めていく予定。
- 問題構成や内容の検討に当たっては、科目別ワーキンググループにおいて今回の試行調査問題の作成に携わっていない外部有識者からの意見を聴取し反映していく予定。現時点でいただいている有識者のコメントについては別紙の通り。

<記述式問題の自己採点について>

- 記述式問題の自己採点については、参考動画を大学入試センターのホームページで公開中。なお、今回の試行調査における国語の記述式問題の正答の条件については、単純な要素の組み合わせではなく、文脈を構成できているかどうかを条件としている多少複雑なものも含まれており、自己採点がどの程度可能かなどを見極めていく予定。

有識者からいただいたコメント

〔国語〕

◆ロバート・キャンベル氏（国文学研究資料館長、中央教育審議会教育課程部会委員）

「国語」では、従来のように受験生が教室で学んだ基礎知識の程度を計測するだけではなく、さまざまな題材を与え、整理させ、その過程で深められた思考の形跡を浮き上がらせることによって、受験生が主体的に何を学び、考えたかを試すことができることに最大の特徴がある。

この特徴を、設問に用いられた素材と解答方式の重層化から読み取ることができる。既発表の論説などを一元的に読解させるのではなく、ある素材を俎上へのせ、その素材をめぐる人びとの議論や問いかけを重ね、受験生にその議論などを含み込んだかたちで、素材の意味を考えさせるようになっている。読み解くために深められた思考の過程が見えるようにすることで、受験生一人ひとりが積極的に学ぶことの手ごたえや重要性を実感できる試験にはなっているように感じた。

設問の素材に図表や写真が含まれ、文章とともに、それらが的確に理解されているかどうか、あるいは文語表現が「単語」としてだけではなく、文脈の中で十分に読み取れているかどうかなど、記述式や複数選択の解答が導入され、主体的な学びを測る効果に重点が置かれている。これらの点は、高く評価したい。

多角的に、自ら考える力を問うという改善点とともに、従来の試験と比べて情報量がかなり増えている。時間も伸びているが、受験生が解答するのに負担が大きすぎないか、が課題として浮上するかもしれない。また素材の重層化にともなって、毎年、安定した高品質の素材と作問をどう担保するか、試験作成の仕組み自体に対し強化や工夫が必要であるように考えている。

〔数学〕

◆小谷元子氏（東北大学大学院理学研究科教授、総合科学技術会議議員、中央教育審議会教育課程部会算数・数学ワーキンググループ主査）

大変に楽しく解かせていただきました。日常の問題を、自然な試行錯誤の中から、徐々に正解に近づいていく設定は、数学による問題解決の手法を学ぶことにもつながります。これまでの公式を使って正解を求めるという形式に比較し圧倒的に、自立した考えや発想を促す良問です。中央教育審議会の算数・数学ワーキンググループで議論した方針にも良く沿っています。数学は科学の基礎であるので、できれば自然科学や生命科学などに通じる問題もあると良いと思います。実施に向けて、解答形式について工夫いただけますと幸いです。

〔地理歴史、公民〕

◆田中愛治氏（早稲田大学政治経済学術院教授、中央教育審議会教育課程部会高等学校の地歴・公民科目の在り方に関する特別チーム主査）

大学入試センターが作った新しいタイプのサンプル入試問題は、嬉しい驚きであった。学習指導要領の見直しの過程で、地歴・公民の分野での特別チームでの議論は、高校生にいかに考えさせるか、どう考えさせるかということをも最優先課題としていたのだが、今回のサンプル問題はその精神を大変良く具体化している。

論述式でなく、客観形式の問題でありながら、これほどに受験生に考えさせる問題を作ることができるのかという驚きと、作題に携われた先生方のご苦勞が想像できた。受験生に思考の大切さを教えることができる良い問題を良く練り上げられたと感服している。

例えば、基礎知識を必要とする問題でも、直接それを問うのではなく、その知識を基に考えて答えるように工夫された問題など、非常に工夫が行き届いて、受験生に考えて解くことの重要性を分らせる良問を作られたことに敬意を表したい。

◆古城佳子氏（東京大学大学院総合文化研究科教授、中央教育審議会教育課程部会高等学校の地歴・公民科科目の在り方に関する特別チーム委員）

高等学校の学習指導要領の改訂が2022年度に行なわれる予定であるが、科目の改編は別にして、この改訂に向けて現在の高等学校の学習で習得することが期待される能力について、プレテストは問う内容になっていると感じた。特に、資料から読み取った情報を基にして考察する力、情報を基にして比較や関連づけを行なう力、現代社会の課題と結びつけて考える力を問う姿勢は顕著である。問題文の形式も、史料、図表、グラフなどの情報を中心に据えて生徒間での討論であったり、テーマに沿った学習発表であったりと高等学校で今後期待される学習のあり方に沿っている点は、問題文にも工夫がなされている。また、問題文や資料をきちんと読まなければ解答できない工夫もなされている。

用語や年号の記憶に偏る傾向が強かった社会科学習を変えようとする姿勢は評価する。思考する前提として知識の習得が重要であるのは言うまでもないので、知識がなくとも解けてしまう問題ではなく、知識の理解力、活用能力を問う問題を今後も工夫してもらいたい。

〔理科〕

◆大島まり氏（東京大学大学院情報学環、生産技術研究所教授、中央教育審議会教育課程部会委員）

今回の試行テストは、今までの入試問題の傾向と異なるため、戸惑いを感じる人が多いのではないかと思います。しかし、次期学習指導要領を視野に入れ、「知識の量」から「知識の質・深み」を問う問題への方向性を模索した取組であり、その第一ステップとして評価できるのではないのでしょうか。各単元で習得した基礎的知識を問うだけでなく、横断的な問題もあり、これらの問題を通して内容を読解し、知識を組み立て考える能力も問われています。

全体として、様々な挑戦的な試みがなされていて、熟考された良い問題と言えます。一方、説明文が比較的長く、問題が多いと感じられるなどの、課題も見られます。試行テストの結果を分析、検討することで、具体的な課題を明確にし、思考力や判断力等も評価できる、より良い問題の作成へと改善していただきたいです。そして、新しい時代に必要となる資質・能力の育成へとつながる、そのような入試改革となることを期待しております。

◆塩瀬隆之氏（京都大学総合博物館准教授、中央教育審議会教育課程部会高等学校の数学・理科にわたる探究的科目の在り方に関する特別チーム委員）

試行テスト受験者の多くは、まず設問文の長さに躊躇し、全選択や該当なしの選択問題に戸惑われるかも知れません。しかしそれは、深い読解力を必要とし、状況を分析する思考力、そして消去法でない確かな判断力を問うための新たな作問指針によるものです。

設問文が長い、選択肢が複雑すぎる、といった消極的な声上がることも予想されますが、まさに「急激な社会変化の中でも、未来の創り手となるために必要な資質・能力」を問うことに挑戦するメッセージがこめられた作問と受け止めたいと思います。「これまでの暗記中心の勉強では通用しない」という声上がることを歓迎し、試行テストの点数や難易度は一旦わきに置いて、思考力や判断力の習得度を問う内容かどうか精査すべきです。

全数選択と該当なしを組み合わせると極端に難易度が上がり、長い設問序文も受験生に敬遠されたりする恐れがあります。しかし、設問形式ごとの偏りを分散させるなど工夫の余地が十分に残っており、結果の点数だけに着目してせっかくの挑戦に対して否定的な判断が下されることは避けるべきです。教育関係者の皆様におかれましては、本丸の入試改革を後押しするような建設的な議論につながる新テスト試行の分析、検討を期待しております。